

日曜に考える

政界

1986年7月の衆参同日選で大勝した首相、中曽根康弘。自民党総裁任期を1年延長し政権の総仕上げに位置づけたのが抜本的な税制改革で、柱はいまの消費税につながる新型(大型)間接税の導入だ。

中曽根は同日選での自らの発言が足かせとなった。「大型間接税はやりません。嘘をつくような顔にみえますか」。公約違反の批判を浴びずに方向転換する難しいかじ取りを自派の税制

政

まつりごと

その瞬間

政府税調は軽視しない、無視する

(86年 自民・山中税調会長)

売上税決定、党に主導権



税制で意見を交わす山中(自民税調会長)と中曽根首相(1986年10月、首相官邸)

通、山中貞則に委ねた。大蔵省に近い政府税制調査会が抜本改革を答申に盛り込む動きを見せる。中曽根の意向で自民党税制調査会長に就いたばかりの山中は8

月1日、「ゼロから議論する」と突き放した。

政府税調が新型間接税の導入を答申に盛り込む方向性を示し、政府側が党税調に早期のとりまとめを求め、でも「急ぐことはない。じっくりやればいい」。記者団に聞かれると「政府税調は軽視しない。無視する」と言い放ち、政府などの干渉を一切寄せ付けない姿勢を鮮明にした。

口を出さない中曽根もやきもきし、10月18日、税調幹部を交えて官邸で昼食会を開催後、2人きりで協議。30日、党税調は総会を開き、ようやく動き出す。山中は真意を明かさず、中曽根が判断に意欲を示すと「首相に判断する能力はない」と言い放った。一方で山中に

も近い中曽根派の野田毅らは水面下で幹事長、竹下登と制度を詰めた。12月3日、山中が税調会合で新型間接税の「売上税」導入を含む試案を示した。「大型間接税」にあたらないうよう免税点を1億円とし、たり非課税品目を多くあげたりし年内決定にこぎ着けた。党税調の権限を背景にした戦略だった。短期間での決定は党内でも商店主らの支持を受ける議員が猛反発。世論の反対も強く、87年の通常国会に法案を提出したが廃案に終わった。後任首相の竹下はこれを教訓に党内と野党を時間をかけ調整し、消費税

◆「政 その瞬間」は政治が大きく動いた場面を検証し、象徴する言葉とともに人間模様を描きます。

も近い中曽根派の野田毅らは水面下で幹事長、竹下登と制度を詰めた。

導入を実現する。――肩書は当時、敬称略(四方弘志)

山中氏の豪腕を

中曽根氏が期待

野田毅氏(自民党前税調会長) 山中税調会長人事は中曽根首相の意思だった。豪腕を期待したのである。政府税調と党税調は役割が違い、決めるのは党税調だという自負心があった。任せた以上、首相からの指示もなかったと思っ

山中氏は友人だが子分じゃなく、張り合うぐらいのもりだったはず。細かいことは言わず自分で決めるという山中流だった。(インタビューを電子版に▼w。b刊↓紙面運動)

日本経済新聞

野田毅氏「俺が決める、が山中流」

(2月7日付朝刊 日曜に考える・政界面関連インタビュー)

2016/2/7 3:30 | 日本経済新聞 電子版

1986年7月、衆参同日選で大勝した当時の中曽根康弘首相は、政権の総仕上げとして税制改革の実現に動いた。目玉の一つは消費税につながる新型間接税の導入だが、同日選のさなかの「大型間接税は導入しない」という発言が足かせになった。自民党税制調査会長に山中貞則氏を起用し、全権を委ねた。当時、中曽根派で山中氏の「門下生」だった野田毅氏に聞いた。

——同日選後、山中氏が税調会長に就きました。

「山中氏は体調を崩していたが、そろそろということで就任した。徹底した行財政改革をやり、税制改革もやらないといけないというときに、同日選で中曽根氏は『大型間接税はやりません』とやってしまった。選挙には勝ったが、残り1年で(間接税の導入決定を)やらざるをえなかった。一般歳出の伸びを抑え、公共事業も極力抑制していた。いよいよ新型間接税を入れて、というところだった」



野田氏は中曽根派で山中氏の「門下生」だった

■責任は政治家が取る自負心

——「山中税調会長」人事は中曽根氏の意味で決めたのですか。

「そりゃ中曽根氏だ。豪腕を期待したんでしょう。短期間でまとめないといけないから。党税調のドンだった。もちろん、元蔵相の村山達雄氏や地方税に詳しい奥野誠亮氏もいた。相当な右腕がついているから安心してやれたところもあったと思う」

——山中氏は新型間接税導入を含む答申を出そうとした政府税制調査会について「軽視しない、無視する」と言い放ちました。

「山中氏一流のワーディングだ。政府税調と役割が違くと。税の論理、国民への説得力や説明も必要で、そこは政府税調の学者ら先生方がいい。決めるのは党税調、最終的には責任は政治家が取るという自負心だ。それがないと税調会長はやっていられない」

——山中氏はなかなか党税調で議論に入りませんでした。

「率直に言ってあまり乗り気じゃなかったんじゃないか。年末の通常の税制改正と同じように決められる筋合いのものではない。中曽根氏が同日選でタンカを切って余熱が残って

いるときにやるのは早いと思っていたかもしれない。山中氏には聞かなかったが。自業自得だと思ったかもしれない」

——それでも山中氏は12月に「売上税」という名で導入を提案し、党税調でまとめます。翌年に国会に提出した法案は野党の抵抗で廃案になりましたが、年内決定は当初から決めていたのでしょうか。

「そうだと思う。暮れの慌ただしい中でぱっぱと決めていった。あまり細かいことまで言わなかったが、そこは山中流で、おれが決めると。私は幹事長だった竹下登氏と相談した。蔵相をやったりしてよくわかっていたから。中曽根氏の大型間接税をやらないという発言を乗り越える知恵はないか、とね。結局、非課税品目をたくさんつくることになった」

——中曽根氏から山中氏に指示や提案はあったのでしょうか。

「なかったと思う。任せた以上は。山中氏は中曽根氏の友人だが子分ではない。張り合うぐらいのつもりで、何回か中曽根派から独立して自分の派閥をつくらうとしたぐらいの人だから」

■軽減税率「ずさんな制度つくれば自殺行為」

——昨年秋まで税調会長を務めました。当時と違い、消費増税に伴う軽減税率の決定経緯をみると安倍晋三首相ら官邸主導で決まりました。

「不思議に思う。税務行政の最高責任者は本来、財務相だ。ずさんな制度設計はできないはず。財務相が責任を持ってないようなことを党が言うのはわかる。選挙協力とか政治的要素があるから。官邸は政府だから本来は財務省と一体のはずで、ずさんな制度をつくれば自殺行為だ」

——増税分を後から還付する案を主張する中、首相から税調会長の交代を告げられました。交代は電話で突然だったのですか。



「そうだ。いずれ話す場面があればと思っていたが、私を横においたままで話が進んでいた。首相からは『(税調会長の在任期間が)山中さんより長くなるという人もいて。後任は後輩の宮沢洋一さんをお願いしようと思います。引き続き最高顧問としてよろしく願います』と。首相から敵がい視されるようなことは一切していないつもりで、最後は首相の思いが通るように上手にやってきたつもりだ」

——生鮮、加工食品を軽減対象に含め、1兆円の財源が必要になりました。

野田氏は税調会長の交代について「首相から敵がしい視されるようなことは一切していないつもりだ」と振り返る

「肥大化して低所得者以外の方がメリットが大きいと何をやっているのかということになる。社会保障財源に穴があくのは確かだ」

——首相と自民税調の関係はどうあるべきでしょうか。

「首相は税の詳しいことはわからない。ただ、経済政策、金融、産業など万般のことを考えて組み立てていく。大事なのは執行をどう確保できるか。税務行政で適用できるかどうかは必ずチェックしないといけないが、そこは専門的な知識が必要だ。役所をしのぐくらいの詳しい人物が税調に座るのが大事だ。それを政権のリーダーが頭に入れてやりたいこととうまく調整していく車の両輪のような関係だと思う。今回は首相の周辺が首相の力を利用して押しつけようとした」

(聞き手は四方弘志)

NIKKEI Copyright © 2016 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。